

オンタリオ湖のほとり トロント大学の夏

— 研究生活三十三年の念願 —

永治日出雄

1967年東京から愛知教育大学に赴任したとき、私はライフワークを方向づける一冊の学術書を携えていた。カナダ人D. W. スミスによって執筆され、2年前にオックスフォード大学出版部から公刊された『エルヴェシウス — 迫害の研究 —』(D. W. SMITH, *A Study in Persecution*)である。大学院での学業を5年あまりも重ねながら、専念すべき研究テーマをなお模索していた私は、1963年神田の洋書店でエルヴェシウス著『精神論』(C.-A. HELVETIUS, *De l'Esprit*)の原典抜粋本を見つけ、この知られざる思想家に本格的に取り組むこととなった。まもなく同書の初版やエルヴェシウス全集を蔵する東京大学図書館に精勤し、欧米で刊行された評伝や専門書もいくつか取り寄せる。しかし、そうした先行研究のなかでスミスによる最新の労作は、問題意識の明確さ、資料調査の徹底性、考察と論証の緻密さ、さらには史料・文献目録の周到さにおいてとりわけ卓越したものであった。

フランス革命の思想的源泉とされる十八世紀の啓蒙運動のなかで、『精神論』刊行に対する迫害は、ルソーの主著『エミール』やディドロ＝ダランベール編『百科全書』への弾圧に匹敵するものであった。絶対王政とカトリック教会を痛烈に批判したこの書物は、高等法院の中庭で焚書にされ、ルイ十五世の寵妾ポンパドゥール夫人らの調停にもかかわらず、著者エルヴェシウスも宮廷の要職から追放された。スミスによる綿密な究明は、『精神論』に対する王権の検閲と裁可に始まり、カトリック教会やソルボンヌ神学部による弾劾書、高等法院大法廷における長大な論告と苛酷な判決へと向けられる。このような論述を読み進む私自身の周辺も、実際には思想の統制や弾圧と無縁ではなかった。勤務先の愛知教育大学では自治会の役員を務めた学生が教員採用試験で十年來不当な差別を受けたと密かに言われていた。そうした事態が卒業論文のテーマ設定にまで危惧を及ぼしながら、全国的な大学紛争が波及する1969年まで、話題にすることすら教官の間でタブーとされた。

1978年ルソー＝ヴォルテール歿後200年を記念する国際研究集会に参加するため、初めてヨーロッパに旅した私は、啓蒙思想を論じ合う各国の学者・知識人と知り合った。また、その翌年から文部省在外研究員としてソルボンヌ(パリ第一大学および第四大学)で哲学・思想、文学史、革命史等の大学院ゼミに出席し、十八世紀研究の長老格で、エルヴェシウスの数少ない専門家であるI. ブラヴァル、G. ベッス両氏の指導も仰いだ。新緑の野に杏の花が彩りを添える1980年春、私はノルマンデーの森に築かれた城館ヴォレを訪れ、いまなお史蹟を引き継ぐエルヴェシウス直系の子孫ダンドロー一家から心暖かな歓待を受けた。そこでも往時の学芸サロンを彷彿とさせる瀟洒な広間で、カナダ人スミスの業績が深い敬意をもって再三語られ、凛々しい哲学者エルヴェシウスや絶世の美人と伝えられるエルヴェシウス夫人の彫像の脚下に、古今にわたる関連資料に交えて『エルヴェシウス — 迫害の研究 —』も陳列されていた。しかし、以後二十年間国際学会への参加や記録・文献の収集のため、毎年のようにヨーロッパに滞在しながら、この研究者とは一度も出会う機会を得ないで過ぎた。エルヴェシウス研究の最高峰が英語圏カナダ、トロント在住であることすら当初は奇異に映り、フランス思想史の学徒として私がアメリカ大陸への旅を思い立つことも最近までなかった。

1999年7月末オンタリオ湖畔の高層ホテルに投宿した第二日、評判のスカイドームでトロント・ブルージャイ対デトロイト・タイガースを観戦して帰ると、スミス教授から待望のファックスが届いていた。その前年メキシコ、グアテマラ、キューバを訪れ、ヨーロッパ列強による抑圧と先住民・現地人の抵抗の歴史をつぶさに認識した私は、今度こそカナダと合衆国東海岸へ、という気持ちになっていた。そして、トロント大学の機構や陣容をインターネットのホームページで調べるうちに、スミス教授によって組織された共同研究(エルヴェシウス＝グラフィニ・プロジェクト)が重点的な事業のひとつであることを知った。同大学文学部フランス学科気付で私は旅行の日程、研究の経歴、拝顔の希望を手紙に書き、エルヴェシウスに関する自己の邦語論文30点と論題一覧の仏訳をスミス教授に送った。湖面を見渡す素晴らしい眺望を享受できるが、やや割高と思われるホテルを予約したのも、トロントでは交信や応接の便宜を考えたからである。心を弾ませ読んだファックスの文面はきわめて好意的なものであり、翌朝ご自宅に電話すると、若々しい声で面会の日時と場所を定められた。さらに不慣れな外国人の危惧

を察知されて、日時の確認に手書きの案内図を付したファックスがそののち教授から送信されてきた。

湖水の影響を受けてオンタリオ州は高湿多雨らしく、約束の8月4日には朝方から雨模様となった。トロント大学の本拠セント・ジョージア・キャンパスは市内北部の広大な区域を占め、1827年創設のキングス・カレッジをはじめ、250余の校舎・施設を擁している。ホテルからのタクシーが美しい並木道に入り、ヨーロッパ風の重厚な建築を数多く通り過ぎたあと、褐色14階建ての巨大ビルディング、中央図書館ロバーツ・リサーチ・ライブラリに到着した。同行した妻と正面入口で数分待っていると、午前10時長身温顔の紳士が現われ、私の名を呼びながら握手を求めた。推進している共同研究の仕事場が当館の最上階にあり、いまから案内しましょう、とスミス教授は話される。広大なロビーや大閲覧室は最新の設備に輝き、各部門に夥しい数のパソコンと情報機器が配置されていた。エレベーターを2度乗り換え、最上階の一隅へ導かれる。「〈エルヴェシウス＝グラフィニ・プロジェクト〉を実現するため、ここを専有施設として提供されました。」このような説明で教授が指し示したのは、隣接する5つの個室とそれらに通ずる縦長の画廊である。重点的な事業とは言え、スミス教授らの書誌学的な研究が大学当局からこれほど多大な便宜を授けられるカナダの学風にまず私は感嘆した。

同プロジェクトの主要な企画は『エルヴェシウス書簡全集』および『グラフィニ夫人書簡全集』の編纂である。エルヴェシウスに関する約1000通の書簡を集成する事業は、スミス教授の統率、ダンドロー一家の協力のもとに進められ、1981年に第1巻を公刊、最終の第5巻もいまや完成に近いと言う。他方グラフィニ夫人は十七世紀の版画家カローの家系に属し、エルヴェシウス夫人の叔母にあたる。小説『ペルー人の手紙』を著した彼女はヴォルテール、ルソー、テュルゴ、ジェフラン夫人等と親交を結び、その膨大な書簡は学芸サロンの役割や啓蒙思想家の活動を伝える貴重な史料とされる。『グラフィニ夫人書簡全集』の編纂事業はトロント大学教授J. A. ダイナールを主幹として8名の編纂委員、6名の顧問グループによって遂行され、第5巻まで既刊、完成時には30巻を超えると聞く。

スミス教授の個室には事務機とパソコンが置かれ、書棚には初版を含むエルヴェシウスの著作、欧米諸国でなされた先行研究、ご自身による幾多の業績が並ぶ。そうした業績のなかで『ペルー人の手紙』に関する論文など、未見の学術論文をこの場で私は贈呈された。書簡全集の編纂においてとりわけ学術的な価値を高めるのは、全巻にわたる厳密な考証と詳細な註釈である。そうした労苦を如実に示すように、パソコンの傍らには書簡の原本やコピーが逐一透明ファイルに包まれ、スチール製の収納庫に整然と配列されていた。エルヴェシウス夫妻の肖像やグラフィニ夫人ゆかりの絵図に飾られた画廊を見たあと、個室で研究に没頭するダイナール教授に紹介され、記念の写真を撮らせて頂いた。

ロバーツ・リサーチ・ライブラリ貴重書部門にも私たちを案内したあと、スミス教授は館内の喫茶室で微笑しながら話された。『エルヴェシウス―迫害の研究―』を上梓したときはやはり30歳前後であったこと、つとにその時期から幾度も城館ヴォレを訪れ、先代のダンドロー公爵夫妻から恩誼を受けたこと、啓蒙思想研究については『モンテスキュー評伝』の著者R.シャクルトンからとくに指導を受けたこと、トロント大学は数年前に定年退官となり、現在は当地にあるヴィクトリア大学で講義を担当していること、等々を。そして、『書簡全集』の編纂がほぼ完了したいまは、エルヴェシウスの詳しい伝記を執筆したい、と。この人の処女出版に啓発されて、20年後私もそのような原稿を書き始め、所属部署のささやかな研究論集にエルヴェシウス評伝を毎年連載しつつある。しかし、その由緒ある家系を遡るうちに、遙か古代ローマから筆を起すこととなり、哲学者エルヴェシウスに関してはようやく学生時代まで書き終えたにすぎない。

スミス教授に謝意と別れを告げて、勧められるままに午後はカナダ随一の名門、トロント大学のキャンパスを見学する。まず中央図書館近くの古色蒼然たる教会に入り、地下のカフェで軽食を摂った。18世紀の末葉この地に学園が構想されたとき、粗野な先住民の教化と墮落した文明人の矯正が主要な目的であったと言う。この頃から降雨が激しくなり、やがて雷鳴も響き渡った。宮殿にも比すべき偉容を誇り、大学全体の中核であるユニヴァーシティ・カレッジ、壮麗な礼拝堂と中庭で知られるトリニティ・カレッジ。そして、19世紀なかば、カナダ独立の時代に民間から贈与されたハート・ハウスでは、高く聳える時計塔に世界大戦の戦没学生が祀られ、食事や喫茶もできる大ホールで若者たちが寛ろいでいた。学園都市ケンブリッジを想起させる壮大なキャンパスを一巡し、キングス・カレッジ・サークルの芝生を横切る頃には、雨も止んで夕陽が射し始める。女子学生も交えた草野球を大樹の蔭からしばらく眺めたのち、帰り際に構内南端の大規模ブックストアに寄った。そこには欧米の一般書や学術書が積まれるとともに、『エルヴェシウス書簡全集』などトロント大学出版物の専用書架、さらにはカナダ先住民に関する図書コーナーが配備されていた。こうして啓蒙思想を辿る現職最後の旅、三十三年來の念願を叶える一日が終わった。

愛知教育大学教職員組合

組合ニュース

1999年度 第11号

2000年 3月29日

愛知教育大学教職員組合



執行委員会発行(内線 5505)

活・動・報・告 1 組合結成30周年記念企画第一弾「送る会」を開催しました。

出席者50人の盛会でした。

3月15日、組合結成30周年記念企画の第一弾として、組合主催「送る会」を開催しました。この3月に本学を去られる組合員（現在は管理職で非組合員のかたも含む）は、有田節子先生（日本語教育）、石川宗雄先生（化学）、梅垣 弘先生（健康科学）、片桐芳雄先生（教育学）、北川博史先生（地理学）、剣持 淑先生（外国語）、黒川健一先生（幼児教育）、新行紀一先生（史学）、橋本到先生（物理学）、仲山進作先生（総合造形）、永治日出雄先生（ヨーロッパ文化）、堀内久美子先生（養護教育）の12名です。「送る会」には、有田先生、石川先生、片桐先生、黒川先生、新行先生、橋本先生、仲山先生、永治先生、堀内先生の、9名の先生がたをお迎えすることができました。北川先生、梅垣先生、剣持先生からのご寄付やお酒、メッセージをいただきました。

当日の出席者は合計50名と、盛会でした。去られる先生方に一言ずつお話をさせていただきました。組合創設当時の教授一助教授以下の教官の関係のこと、大学紛争のことなど、これからの高等教育と組合活動を考えるにあたって記憶にとどめておかねばならないことを、当時を知る先生方に直接お話をいただく貴重な機会となりました。往年の委員長―書記長コンビの絶妙なやりとりもあり、組合創設期の熱く若々しい空気を感じることができました。

ささやかな会でしたが、終始和やかな雰囲気の中世代間、職種間の交流ができ、別れと門出にふさわしい場となったのではないかと思います。お忙しいなかご出席いただいた先生方、ご寄付や差し入れをくださり会に花を添えていただいた方々に感謝いたします。

マイケル・ロジャーズさん（総合造形）に記念のペーパーウェイトを作っていただきました。

「送る会」の席で、マイケル・ロジャーズさんに作っていただいた、組合結成30周年記念品のお披露目をし、参加された方々に持って帰っていただきました。青、水色、茶、透明、さまざまな色と形の、ガラス製ペーパーウェイトです。ロジャーズさんに30周年記念品の話をしたところ、実に快く短期間で作っていただきました。アメリカ生まれ、イリノイ州で学び、スペイン、デン、マーク、メキシコ、台湾など世界各地を作品発表の舞台としている芸術家が同僚であるという、得がたい幸運を心から喜びたいと思います。

「送る会」に間に合うように第一弾の作品を作っていただきましたが、来年度の組合大会頃には、組合員全員の手にわたると思います。どうぞお楽しみに。

附属高校の先生方にもご参加いただきました。

「送る会」には、附属高校の先生方にもご参加いただきました。この3月に労働条件のことでお話にこられ、その場で加入してくださったのです。今年本学を去られる12人の先生方を失うことは寂しいことではありますが、本学組合が本学教員だけの組織から、附属高校の先生方と共に活動していく組織へと発展したことは、とても嬉しいことです。附属高校の先生方と大学教員組合員のあいだで交流がなされ、「送る会」は新しい出会いの場にもなりました。